橋梁巡礼 2

‖或る建築家の見たる復興橋梁‖

Aさん・Bさん

5…… 木挽橋

「僕はかういふものは見たくないね。あまりに醜い。こんなものについて云々するのも馬鹿化てゐるぢやないか。」

「無感覺極まるね。この人には茶を飲ませても小便を飲ませても何んとも云ふまい。」

「よくこの下を人が通つて行くね。一體圖面を書いてやつたものかしら。」

「さあ。圖面を書きあ恐らく人が吹出す筈だがね。」

「普通にしても柱の下が細く見えるのに、欄干の爲細く見え、その上に段々の緣を取つて線を出したから增々危く見えるのだ。」

「其の上電燈が柱より反つて大きいのだから一層頭でつかちになるのだ。」

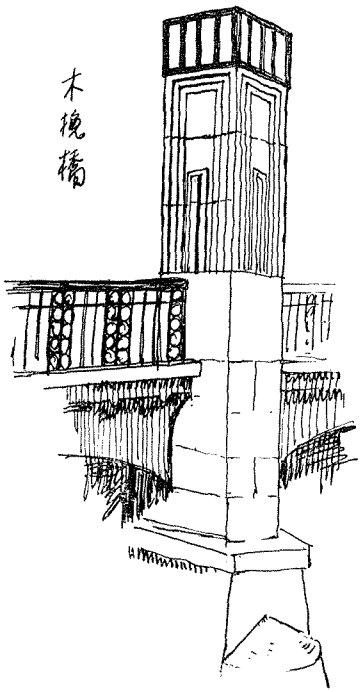
「此の作者には藝術的良心はあるまい。」

「こんな人間に高い月給を拂ふのは勿體ないことだよ。」

「いくら浪人をしてゐるからとて、そんな淺間しいことを云ふまいぞ。誰か聞いてゐて笑はれるからなあ。」

「それに、どこからか招聘された時に足元をつけ込まれるか。アツハヽヽヽ。」

「いかにも　いかにもハツハヽヽヽ。」



6…… 紀伊國橋

「紀伊國橋は工事中だが大部分出來上つてゐるから、一寸拜見して置かう。」

「これは、前の木挽橋や豐國橋よりはいゝね。」

「作者が全々違ふ。」

「大分頭の程度が違ふさ。」

「どつしりとした落ちつきを見せて居るね。」

「柱も欄干もいゝぢやないか。」

「中途にある柱はどうかな。―― ライト式を模したのは惡いね。」

「親柱のドイツ風なのに對して、やゝ調和を缺いてゐるな。」

「欄干もその趣ありだね。」

「又惡口が出だしたが、暑いからこの位ひにして置かうぢやないか。」

「しかしこの橋は佳作の中に入れていゝね。」

「木挽橋や豐國橋等よりはるかに優れてゐるよ。せめてかういふ人たちばかりの設計でやつて呉れゝばいゝがね。」

7…… 水谷橋

「さる程に水谷橋にさつきにけり、か。」

「大震災で落ちたのだね。」

「これでも先の木挽橋よりいゝな。」

「まあつまらぬものより、木造の方がいゝよ。」

「悪けりやあ、直ぐだゝきこはしてやり直せるからな——。」

8…… 築地橋

「やあ、馬鹿に重そうなものがついてるね」

「かゞり火見たいぢやないか。」

「まあそのかゞり火を一つ取つて貰ふか。」

「石の手摺なぞ丸く面を取つたのは僕の趣味からもいゝと思ふが、所々を直角にしてゐるのは如何なものかね。」

「欄干の格子はまさまつてゐると思ふ。」

「しかし模樣はすこぶる稚拙といふ部類に屬するね。」

「それから親柱の小さなのはいゝが、大きい方はまずい。」

「小さな方はこの作者に珍らしく優れたものだね。この橋で僕はこれだけ頂戴するね。」

「豐國や木挽橋に比べても大柱小柱の調和はずつとうまいと思ふ。しかし、親柱の横緣を見ると、日露戰爭の紀念品を見るやうだね。」

「うん。頭は古い。大正も十何年になつてゐることを知らない風に見えるね。しかし正直者らしい作者の個性は見えるぢやないか。」

「例のかゞり火なぞ付けるところはさうぢやないか。柱頭なぞこんな素々しいものでなしに、もつとぐつとつきつめたものであつてほしい。」

「いや。この作者にそこのところが出來ないんだらう。その注文は少し無理かも知れないね。—— この大柱と小柱との間があまり空き過ぎてるやうに思ふが——。」

「そうも云へないことも無いね。—— それから……と河岸に立つて側面を指差して……中央を鐵のアーチにして、兩端を石のアーチにしたのは大膽な扱ひ方だね。横から見ると大柱が非常に細く見えるね。」

「細い。細い！ あまり小細工をやつたからだ。この作者に小細工は禁物なんだからな——。」

「一體橋は河から見るものか、道路から見るものかね。」

「兩方からだらう。」

「新橋の作者はあまり氣取りすぎて居るが、是は氣取すぎないで失敗してゐる。」

「丁度田舍と東京の會社員みたいさ」

「この作者は可成得意であつたらうと思ふね。可成り廣い橋、可成り美麗なこの橋を設計する時にはね。かう云はれると、可成憤慨するだらうが、それは作者の子供心を傷けるだけだらう。」

「アハヽヽ腹が膨れても悪口が遂に出て來るな。平民(たいらえん)を連れて來るとこれだから弱る。」

……【つゞく】……

——スケツチは——

次號掲載